探せ！ アンデスの動物たち

一般的に工芸品は、植物や動物の繊維（せんい）、土や石、ガラス、木など、さまざまな素材で作られています。そこにほどこされる文様（もんよう）も、地域や時代を超えて、身近な動植物から幾何学的（きかがくてき）なものまでさまざまです。ここでは、ペルーの資料にみられる動物の姿に注目してみましょう。

◆案内人◆

ペルーの衣装から出てきた
コンゴウさま

とりげしんじんもんかんとうい
「鳥毛神人文貫頭衣」※

※コンゴウインコの羽根

問題：次に登場するA～Cの資料（p.２～４）には、どんな動物がいますか？

◆ また各資料が下記のうちどの素材で作られているのか考えながら解いてみましょう。

【 木 ・ 石 ・ 土 ・ 植物の繊維 ・ 動物の毛 ・ ガラス 】

A

Q 何の動物でしょうか？

※ ２種類の動物がいます。

ぎょろっとこちらを見ている
動物は猫に似ているが…
からだの斑点（はんてん）と鋭（するど）い爪（つめ）がヒント
になるぞ。

B

Q これは何の動物かな？

これは難しいぞ。アンデスの高地に住む、ラクダにも似た動物なんじゃが…。

a.

b.

a.は空に住んでおって、
b.は水中の生き物じゃよ。
分かるかな？

Q 何の生き物でしょう？

※ a.とb.の部分に1種類ずつ動物の文様（もんよう）があります。

C

◆ STOP ◆ 次は解答ページ

分からなかった問題はページをもどってもう一度トライしてみよう！

A 「ジャガー・鳥文様　マントの一部（男性用）」

チャンカイ文化（10～15世紀）
ペルー中部海岸

つづれ織りという技法で作られた、染織品の裂です。身体を横向きに顔をこちらに向けるジャガーがいます。生息地帯はアマゾン川一帯の水辺で、アンデスの高地には居ないのですが、ジャガーを神格化した文様は古くからありました。これは、人々がネコ科動物を「地上において最も神聖な存在」と見なし、畏敬の念を抱いていたためです。ジャガーの周りには、海鳥（ウミウ）と思われる鳥が11羽みえます。

「彩色リャマ形土器」 B

チャンカイ文化（10～15世紀）
ペルー中部海岸

リャマは人々にとって大切な家畜でした。おもに荷運びを担いましたが、その肉は食料に、糞は燃料にそして毛は染織品の材料になります。儀礼のときには神様に捧げられるなど、人々の生活に欠かせない動物でした。この土器には背中に穴がありますね。土器の中が空洞になっているので、もとはこの部分に注ぎ口が付いていたのかもしれません。水や酒といった液体を入れたのでしょう。

素材

獣毛※

土

獣毛と木綿※

※次頁に説明があります

C 「海老・鳥文様　衣服の一部」

チム文化（10～15世紀）　ペルー北部海岸

長い触角と足をもつ海老の姿が、頭を下に向けてたくさん並んでいます。アンデス地方西部のペルー沖には、フンボルト海流が育む豊かな漁場があります。沼や河川も含めて魚介類に恵まれた環境下だったようで、海老に限らず、アンデスの工芸品には「おいしい文様」がたびたび登場します。

＊3点すべて美術工芸館の所蔵品です

アンデスと芹沢銈介

アンデスを含めた中南米のコレクションは、晩年の芹沢銈介が熱心に集めたものです。とくに多いのはペルーの染織品で、インカ帝国時代（1000年頃～1532年）より古い資料もあります。アンデス文化は文字をもたない代わりに文様が発達したといわれます。芹沢もそのデザインに魅了され、大いに刺激を受けたことでしょう。芹沢が集めたアンデスコレクションのうち、美術工芸館では約100点を所蔵していて、質・量ともに際立っています。なお芹沢が集めた世界各国の品々は「もうひとつの創造」と称されます。

豊かな自然が紡ぎだす染織の世界

獣毛はウール（羊の毛）をのぞく動物の毛の総称です。アンデスではリャマと同じラクダ科動物（アルパカやビクーニャ）の毛が一般的で、マントやポンチョといった染織品の素材になりました。
また、織物には陸海空さまざまな生き物の文様が同居しますが、そこには起伏に富んだアンデスの地形も関係しています。太平洋に面した海岸部、険しいアンデス山脈を有する高地など、それぞれの場所に住む人々の交流によって、独特の文様が生まれました。

当館ホームページでは、芹沢銈介が集めた世界各国のコレクションを、ほかにもご覧いただけます。